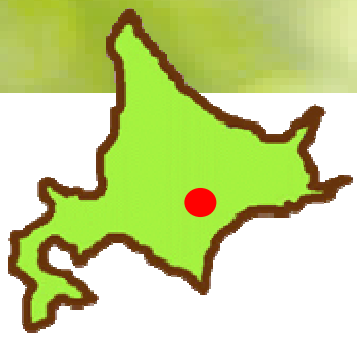
Ⅱ. 道東ブロック－十勝・帯広市の紹介編

プロフィール

明治16年に本格的に開拓がはじまり、碁盤目状の道路網など計画的な市街地形成を行ってきました。
また、農業を主要産業とする十勝地方(約35万人、1市16町2村)の中心地であり、農産物集積地、商業都市としての役割を担っています。

＜帯広市の人口＞
168,605人(世帯80,318)
(H21年8月末現在)

＜帯広の面積＞
618.94Km²



開墾の歴史

帯広の街は、官主導の屯田兵や旧幕府家臣による開拓ではなく、静岡県出身の依田勉三率いる晩成社一行が1883年（明治16年）5月に入植したのが開拓の始まりである。その後の開墾は冷害や虫害など苦難の連続であったが、1895年（明治28年）に北海道釧路集治監十勝分監（通称十勝監獄。現在のグリーンパーク一帯）が開設されると、受刑者によって大通が整備されていき、市街地が形成されていった。

厳しい気象条件

内陸部にあるため気候は寒暖の差が激しく、夏は30℃以上、冬は-20℃以下になる事もある。冬には風の弱い快晴の日も多く穏やかな気候である。快晴の日は放射冷却現象により強く冷え込む。明治35年1月には最低気温-38.2℃を記録しており、日本観測史上2位。積雪量は北海道内でも少ない。その一方、夏は高緯度の割に気温が高く、フェーン現象などにより猛暑となることもあり、北海道内では冷涼な気候とはあまりいえない。平成19年8月に35.5℃など、猛暑日の記録もある。

食の歴史・文化

帯広開拓時代、依田勉三が食料目的で豚を、耕作目的で馬を連れてきました。

豚はその名残で、帯広（十勝）の食文化から豚は切っても切り離せない。豚丼然り、「肉と言えば豚」というほど豚肉が料理に使われています。馬は、ばんえい競馬としてその歴史を残している。

北の屋台

「帯広を元気にしたい!」という市民ボランティアが集まり、冬の寒さや法律の壁などの諸問題を乗り越え、2年半の調査研究を経て、2001年7月29日にｵｰﾌﾟﾝしました。空洞化した地方都市の賑わいを取り戻すことから始まったプロジェクトとも言われている。

独自の情報網

北海道内の新聞購読者世帯のうち7割の市場占有率を 占めている北海道新聞が唯一トップシェアを逃しているのが、十勝毎日新聞が圧倒的シェアを誇っている十勝管内である。他地域から十勝管内に進出 している外来資本の企業からの購買よりも地元資本の企業をひいきして購買することで、地元・十勝管内の住民同士、地元資本の企業同士が互いに共存共栄を図る 十勝管内ならではの地元主義（十勝モンロー主義）を象徴している一例である。地元メディア、ケーブルテレビ、コミュニティＦＭ放送局なども持っている。十勝毎日新聞社が夏に主催する勝毎花火大会は全国有数の規模を誇り、北海道中から観光客が訪れる夏の風物詩となっている。

開閉できるアーケード街

帯広 広小路商店街は、帯広市の駅北で、南北に伸びる「帯広平原通商店街」と「大通商店街」との間で、東西２００m余りの区間に位置し、帯広の中心商店街の軸であり、またアーケードのある商店街として広く知られています。アーケードがあるからこそ、各店の連帯感も生まれます。一方、弱みは「暗いこと」。アーケー ドは人が集まりにくい原因にもなりうるので、そこをどう解決するかが２０１０年度予定の再生工事スタートに向けた課題と認識しています。

帯広の自慢

●広大な敷地　●日照率　●自給率1000%　●十勝ブランド

広大な敷地と高い日照率に恵まれた帯広は厳しい自然環境にも負けず、小豆やビート、ジャガイモなどを原料に「十勝ブランド」という独自の食文化という財産を手に入れました。

そのブランドを武器に大都市で発展する企業にも負けないような地元企業が帯広から発信されるようになりました。

そんな帯広の「困った」ところ

- 中心部の空き店舗化
- 大型店舗の中心部からの分散化
- 寒暖の差が大きい（±60℃）
- 公共交通機関の衰退
- 農業の後継者不足
- 地震が多い
- 人口の減、高齢化
- 教育機関が少ない
- 地域コミュニティーが薄くなった
- 旧イトーヨーカ堂店舗の再活用が進まない
- グリュック王国の再活用が進まない
- ＷＲＣなどの大きなイベントの減少
- アミューズメントスポットがない